

資料紹介 Data

片山楊谷筆「竹虎図屏風」について

山下真由美¹

キーワード：片山楊谷、虎図、鳥取藩、長崎

本作は、当館が平成二二年度に開催した『楊谷と元旦―因幡画壇の奇才―』展の会期中に発見された片山楊谷（一七六〇～一八〇一）の屏風で、展覧会後期から特別出品し展観の機会を得たものの、図録には所収することができなかつた作品である。六曲一双という大作で、楊谷の初期を代表する作品と言えることから、ここにカラー図版とともに紹介することとしたい。

本紙の法量はそれぞれタテ一五三・四センチ、ヨコ三五八・七センチで、タテに三枚紙を継ぐ。「瓊浦楊谷道監寫」の落款と、「源流得真」の白文楕円印ならびに「楊谷」「義父」の大きな白文連印が右隻一扇目に捺されているが、「源流得真」の印はなぜか上下逆となっている（落款印章）。左右の状態に特に大きな差はない。屏風箱が付属し、「ろ第六三七号 種類／屏風 品目／楊谷 備考／猛虎 雪心庵」と記された題箋と「雪心之庵」の朱文方印を捺した紙が貼られている。本作は現在、鳥取県内の個人の所蔵であるが、以前は鳥取市内の旧家から出てきたものであるとのことで、それまでの来歴は不明である。

さて、画面に目を移すと、右隻には著色の二頭の虎が威嚇するような表情で顔を左に向けている。左側の虎の腹や後ろ足は右側の虎と重なって見え、密集する毛並みによってやや曖昧な境界となっている。二頭の虎を囲むように捲る墨竹は、大きな刷毛でダイナミックに表され、左へ湾曲した後、一旦

上部へ抜け、その先端は五扇目から六扇目へと続く。一方、左隻には、一頭の巨大な虎が右隻の虎と対峙し、頭を低くして攻撃の準備態勢をとり、背中と尻尾の毛を立てて挑みかかろうとしている。虎の尻尾は画面を突き出た後、六扇目の上部に再び現れて体躯の大きさを強調し、虎の後方に生える屈曲した竹とたわむ笹が、右隻とのバランスをとる。画中の余白には金粉が雲形に蒔かれているが、光の加減で判明するぐらいのごく鈍い光り方となっている。

ここで虎の表現に注目してみたい。一頭の虎の頭部の大きさは三〇センチを超えて威圧感があり、膨大な量の線が毛並みを表すだけでなく、虎の体躯そのものを形作り立体感を生み出している。この特徴的な毛描きについて詳しく見てみると、まず線は、胡粉、茶、黒の三色を基本とし、その濃さや太さを変えて描き分けている。虎の柄である黒の縞は、初めに薄墨を刷いた上に墨線が引かれているが、その他の部分に下塗りをしていないようである。目や鼻、爪をのぞいて輪郭線も見られず、無数の線が毛の流れに沿って引き重ねられることで外形を形作っていることがわかる。中でも顔面は複雑な凹凸や毛流れが繊細で多様な線によって巧みに構成されている（部分図）。一方、顔を超えて放射状に伸びる白い鬚や体躯の毛の

Tigers and Bamboo Screens by KATAYAMA Yokoku

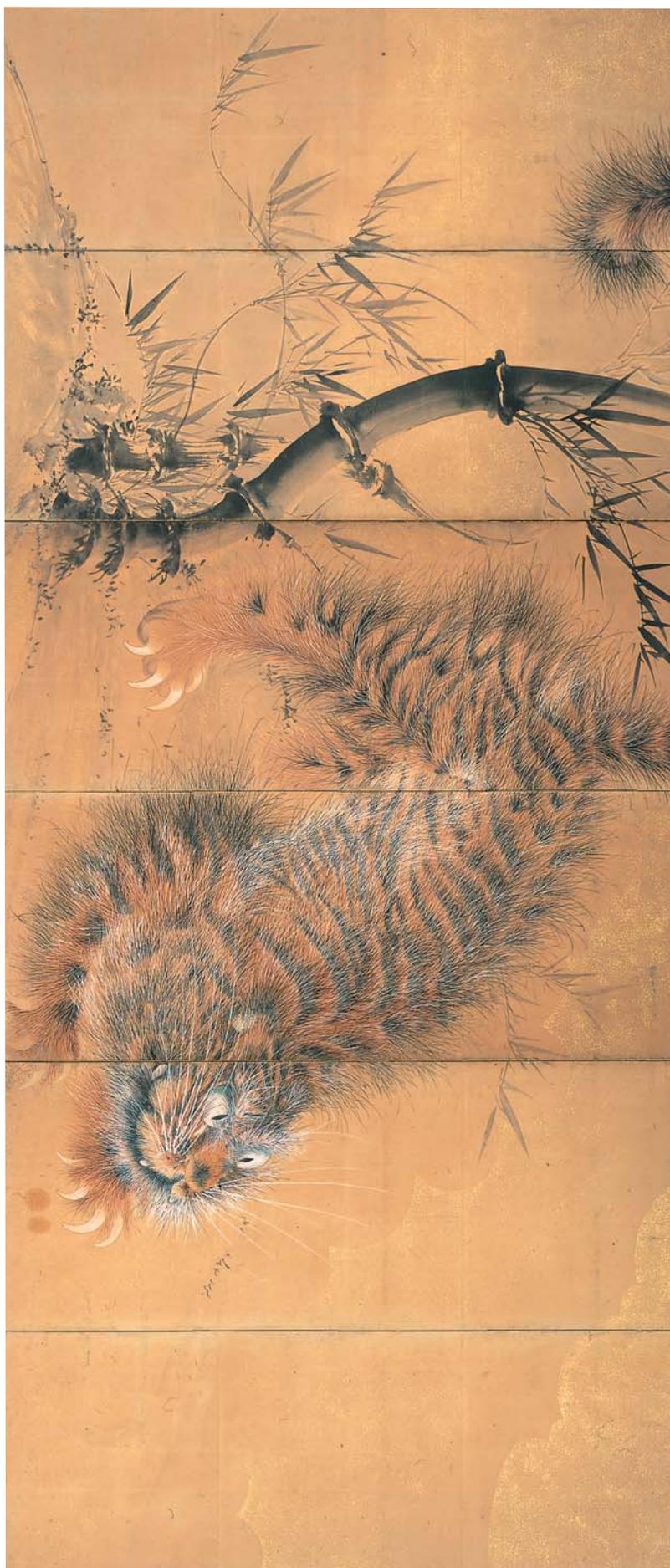
Mayumi YAMASHITA¹¹鳥取県立博物館 〒680-0011 鳥取市東町 2-124

Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan

E-mail: yamashita-ma@pref.tottori.jp

[受領 Received 13 December 2011 / 受理 Accepted 1 February 2012]







【部分図】



【落款印章】(1/2 縮小)



【参考図】

線は六曲一双という大画面に負けぬ迫力で一本一本力強く長く引かれ、針のように硬質な印象を与える。このように、本作にみる虎の毛描きは、力強い線が主体となっており、虎は剛毛に「覆われている」という感じがするのが特徴となっている。

片山楊谷は医師・洞雄山の子として長崎に生まれ、四歳で父を亡くし、安永元年（一七七二）、一三歳のころに故郷を離れ諸国を遊歴したとされる。同七年には備前国にて弟子をもち、天明六年（一七八六）には甲斐国、さらに江戸へと歩を進めている。本作に年記はないが、抑揚の少ない謹直な書体や、「道監」号と「楊谷」「義父」印の使用は、安永九年の「猛虎図屏風」（鳥取県立博物館蔵、【参考図】）を始めとする二〇代の作品にしか見られないことから、本作は楊谷の画業の初期の制作と考えられる。また、「猛虎図屏風」にみる虎の表情と比較したとき、墨と著色の違いはあるが、本作の方がより後年の虎の顔に近く、落款の「楊谷」の「谷」の二筆目と三筆目をつなげる書き方は、天明二年の「月夜枇杷鳥図」（渡辺美術館蔵）における落款の書体と近いことから、天明二年前後の作とみておきたい。この頃楊谷がどこにいて、誰の需めに応じて本作を制作したかは不明であるが、『画伝誓文』（註1）にみる楊谷の門人一覧を見れば、江戸中期以降、鳥取の町人の筆頭格であった大谷文次郎の名があるなど楊谷と有力町人との関わりが知られ、力の入った本作もそうした富裕層の注文に応え腰を据えて取り組んだものであったと推測される。

楊谷の初期の作品を見てみると、中国画と見紛うほどの細筆による鮮やかで緻密な描写や人物表現の作がある一方、墨の濃淡を巧みに用いた豪快な筆捌きのみられる花鳥画もあり、幅広いスタイルを有していたことがわかる。また楊谷は、虎の絵を生涯主要な画題として多数描いているが、本作には虎の毛描きにみる気の遠くなるような線の積み重ねといった楊谷の特質が現れ、その後の楊谷の虎図の原型ともなっており、若い楊谷がこの毛描きを武器に全国を渡り歩いていたのであることが想像される。そして数ある虎図の中でも本作は、画面の中にもうまく収めようとする意図よりも、勢いに任せたような力強さと若さの溢れる画風となっている。

ここで楊谷の特質と記した、毛描きによる量感描出の源はどこにあるのであるのか。虎図と言えば、同時代に活躍した岸駒（一七四九「または一七五六」〜一八三八）の名が思い起こされる。前田育徳会が所蔵する岸駒

の「松下飲虎図」と比較した場合、線の積み重ねによる量感の表出という点は楊谷と同様であるが、本作にみられるような線の主張は控えられ、より体躯に沿った繊細な表現となっている。また、『国華』一〇六一号に紹介された岸駒の「虎図屏風」(註2)と比較してみると、ほとんど輪郭線を用いない点は共通するものの、墨のぼかしを用いた面的な表現が見られ、楊谷の虎のように毛で覆われているという印象ではない。

楊谷が長崎の医家に生まれたことは先述したが、その居住地は出島に程近い浜町と考えられ、異国情緒漂う長崎の街で、中国の文化に自然と触れて育ったことは想像に難くない。また、虎の剥製などのさまざまな渡来品を見る機会も多かったであろう。楊谷は清人画家の費漢源の流れを汲むと自称しており、諸国を巡るに際し、唐絵を描く画家として自らを位置づけていたと考えられるが、それは寛政五年(一七九三)に楊谷が鳥取藩西館の茶道家・片山家を継ぐまで、「瓊浦楊谷」と画中に書き入れ、自らが長崎という特別な土地の出であることを謳っていたことからもうかがえる。恐らく楊谷は、本作にみるような奇抜でエネルギーシユな画風を新機軸として打ち立て、全国を行脚していたに違いない。楊谷の伝承として伝わる、髪を紫の糸で束ね、通りを大股で闊歩し人々の注目を浴びていたといった姿には、わかりやすい「奇抜さ」があり、そこに異国風を演じているようなパフォーマンス性をみるの

は穿ちすぎであろうか。しかしながら、見知らぬ土地で画力を頼りに生きていくには、そのようにする必要があったようにも思われるのである。

それはさておき、本作は楊谷の特質を表す優品であるだけでなく、生涯にわたって描き続けた虎図の原型ともなる初発的な作品である。後年における楊谷の虎図ではこのような線の主張は控えられており、それはある意味、より現実に即した表現とも言えるかもしれないが、本作にみる圧倒的な線の集合は若々しいエネルギーに溢れ、時を経た今も人々を瞠目させる力を有している。本作は、長崎というバックグラウンドをもつ若き楊谷の、絵筆一本で生きていこうという気概の中で生み出された稀有な作例といえるだろう。

謝辞

作品の調査ならびに写真掲載にあたり、所蔵者の方より御協力・御高配を賜りました。また、本稿執筆にあたり、査読者の方には大変貴重な御助言を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

(註1) 個人蔵。『楊谷と元旦——因幡画壇の奇才』展図録(鳥取県立博物館、平成二二年)

に資料翻刻を記載。

(註2) 編集部「岸駒筆 虎図屏風」『国華』第一〇六一号、国華社、昭和五八年三月